NEWS LETTER
甲南大学人間科学研究所

KIHS
Konan Institute of Human Sciences

2012 Vol. 26

'08-'12 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択

KIHSの第三期の活動は、最終年度を迎えました。
これまでの活動を総括し、今後につなげていくために、
今年度もさまざまな企画を準備しています。
今後ともご支援・ご協力を賜りますよう、
どうかよろしくお願いいたします。

活動報告

プロジェクト4では、これまで「心理療法の現在」というテーマを、様々な観点から調査・研究を行って参りました。現在、それらの一環として、「自伝的記憶と心理療法」と題し、各心理療法の分野における記憶の取り扱いの共通性や独自性について議論を深めております。

この度の研究会では、「発達障害と過去の体験―タイムスリップ現象―」と題して、浜松医科大学の杉山登志郎先生をお招きし、発達障害の記憶処理またはタイムスリップ現象の問題、発達障害とトラウマの親和性、発達障害のトラウマ治療についてご講演を賜りました。杉山登志郎先生は、我が国における自閉症あるいは自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）や、発達障害に関する臨床実践および研究の第一人者でおられ、ASDを初めとした発達障害や児童虐待のトラウマの問題などに関して、多数のご著書を執筆されています。杉山登志郎先生からは、ASD者に特有なフラッシュバックであるタイムスリップ現象の臨床的特徴、発達障害の発現へのepigeneticsの関与、ASDの中核となる精神病理、ASD者のトラウマの問題、タイムスリップ現象へのEMDRの臨床的適用や薬物療法など、発達障害の記憶に関する臨床上の問題を多岐に渡ってご講演いただきました。長年、ASDや発達障害に関して数々の臨床を実践されてきた先生のご講演だけに、一つ一つの説明に「なるほどそのように理解すればよいのか」と腑に落ちる体験が数多くありました。ASDなどの発達障害の方々の臨床上の問題に直面するとき、治療者や支援者は認知や記憶などの彼ら彼女らの体験世界をこちらが推測して理解するしかないわけですが、なんとなく推測し理解できたとしても、それをうまく言語化できずにもどかしさを感じるということが少なくないと思います。杉山登志郎先生のご講演は、ASD者の内面に生じている体験世界とその体験プロセスを、非常に分かりやすい言葉で説明していただきました。

後半の質疑応答では発達障害のトラウマ治療の方法論に及ぶもの、発達障害特有の記憶の処理の問題など、様々な議論が交わされました。発達障害のトラウマ治療においては、安定した生活と安心感が治療上基本となること、知的な能力の高い場合はトラウマの物語化が可能であること、ASDの特性に起因するように見えるがトラウマ症状が加算されて不適応が生じている場合があり、トラウマ症状が消失すると障害特性が軽減したように見受けられる場合があること、などがフロアとの議論の中で確認されました。また、「ASD者は定型発達者に比べてEMDRによる治療が早く進む印象がある。それはASD者特有の記憶処理の問題なのか」という質問があり、定型発達者よりもASD者は言語概念との結びつきが弱いために、治療作用がうまく働くと一気に変化するのではないか、トラウマとまではいかない不快記憶と状況とのつながりを絶つ作用があるのではないかという議論となりました。その他にも、トラウマの問題がある発達障害者への臨床の留意点について議論となり、一般的なカウンセリングではトラウマ体験を繰り返すだけとなり、どこかで直面化を図るべきという問題提起がなされました。

当日は平日のお昼という時間帯でしたが、教育・医療・福祉など様々な現場に携わる方々が数多く参加して下さいました。このことからもこのテーマと杉山登志郎先生のご講演への関心を裏づけるものといえるでしょう。今後も発達障害とトラウマというテーマを深め、さらに「自伝的記憶と心理療法」という研究テーマについて今後も議論を深めていきたいと考えております。今年度には、同名のテーマで人間科学研究所が企画する叢書〈心の危機と臨床の知〉第15巻を発刊予定です。発刊の折にはぜひ手にとっていただければうれしく思います。

プロジェクト４．心理療法の現在に関する検証
―臨床と研究の即応的関係の構築―

第67回　公開研究会
「発達障害と過去の体験 ―タイムスリップ現象再考―」

第67回杉山先生写真

開 催 日：2012年3月16日（金）　13:00～15:00
場　　所：甲南大学18号館3階　講演室
講　　師：杉山　登志郎
（浜松医科大学／児童青年精神医学）
企　　画：森　茂起（甲南大学／臨床心理学）

プロジェクト3．芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究

第70回　公開研究会
「セラピストとしての芸術家―参加型アートと複数の場をめぐって」

第70回公開研究会の様子

開 催 日：2012年3月31日（土）　13:00〜14:30
場　　所：甲南大学18号館3階　講演室
講　　師：石谷　治寛
（甲南大学人間科学研究所博士研究員／近現代芸術）
企　　画：川田都樹子（甲南大学文学部／芸術学）、
西欣也（甲南大学文学部／芸術学）

近年、アートフェスティバルや美術館では、観客が自由に触ることのできるオブジェ作品や、子どもや大人のための創作ワークショップなどの機会が増えてきました。2011年にはメキシコの作家がブルックリンで一時的な「サナトリウム」を開設し独自のセラピーのレシピを用意したアートイベントなども行われるようになっています。こうした活動に焦点をあてた現代芸術のあり様は参加型アートや関係性の美学と呼ばれ議論されはじめています。

プロジェクト3「芸術学と芸術療法の対話」では、従来切り離して考えられてきた芸術学の展開と芸術療法の理論を歴史的に考察してきました。従来の表現病理学的なアートセラピーの傾向においては、その表現の特質が芸術家の精神状態やアウトサイダー・アートに結びつけられますが、近年それとは異なって、病理解釈よりもクライエント―セラピストの相互的な関係や素材との感覚的触れあいを重視する表現アートセラピーの広がりもあり、アートとセラピーの多様な交差のあり方が見えてきました。今回は参加芸術で心理療法の理論を応用するアーティストを「セラピストとしての芸術家」と総称して再考する試みになりました。

先駆者として、ブラジル出身のリジア・クラークがあげられます。パリで抽象画を学んだクラークは1960年代に、観客が自由に触って動かすことのできるオブジェ《動物》を発表しました。それから彼女は、心理療法の理論を芸術活動に積極的に応用して、グループでのイベントから個人セッションへと発展させることになります。同時代に祖国ブラジルが大きな政変で揺れ動いていたため、彼女自身が一時的な亡命先のパリで大きな苦悩を抱いていたことも無縁ではなかったでしょう。彼女は友人の精神科医ピエール・フェディダらの助力も得ながら、メラニー・クラインやウィニコットのプレイ・セラピーや移行対象という考えを、オブジェを通した芸術と観客との関わりに応用したのでした。こうした芸術家自身による心理療法への関心はパリ大学での学生とのグループワークにもつながります。そこでクラークはカニバリズムの儀式を模して、ひとりの人の体のまわりを果物で囲み、その果物をまわりの観客が食べるというシャーマン的なイベントも行っています。

この試みには、クラークによる芸術のセラピー的な側面が端的に表れていると考えられます。つまり表現によって感情を排出する「昇華」の論理よりも、「取り込み」や「体内化」が行為のなかで模倣されることに重点が置かれているのです。クラークは、この論理を発展させて、1980年になってから個人セッションを行い、ビニール袋や石といった感覚的な素材を使って、クライエントを退行的でボーダーラインの状態に一時的に置き、その幻想的な身体感覚を壊すことで、自己を構造化するという実践へと到達しました。発表者は、こうした着想は1990年代に盛り上がる表現アートセラピーを先取りしているのではないだろうかという問題提起を行いました。彼女の探求から見えてくるのは、芸術家が真剣にセラピーに取り組もうとすればするほど、従来型のアートの特徴だと考えられる描画性やパブリックな側面は失われ、反芸術的でプライベートな側面を帯びていったという逆説です。しかしその探求自体には強い創造性を認めることができるでしょう。

発表者の不手際で予定時間を大幅に上回ることになってしまったものの、さらに「セラピューティック」な側面をもつと思われる作例を次々と見ていき、質疑応答では活発な意見が交わされました。参加芸術で制作される作品の質についての感想や、セラピー的な観点を芸術批評に取り入れることによる新たな可能性といった肯定的な見解、他方で「セラピューティック」という言葉が何を意味しているのかが曖昧だという指摘や、果たしてこれらの芸術自体をセラピーだと認められるだろうかという疑問やその危険性に関する意見もあり、こうした近年の傾向についてもっと精緻に検討していくべきだという課題が浮かびました。また芸術の療法的な側面が強調されるようになったのはいつ頃からだろうかという問いもありました。それに対しては、おそらく1980年代のエイズ・アクティヴィズムの興隆が皮切りになるのではという見通しが立てられました。セラピーと言うからには、治療構造がきっちりと枠付けられていることが肝心だという見解は重要でしょう。それでも、アートセラピストの意見としてクラークの芸術実践はセラピーだと認められるという声もあり、今後の研究の課題も含めて、さまざまな切り口が照らしだされた研究会となりました。なお、人間科学研究所が企画する叢書〈心の危機と臨床の知〉第14巻では芸術学と芸術療法をテーマにします。本研究会の内容を書き直した論考も採録予定です。

これまでの活動

公開研究会

プロジェクト2. 育てる関係の危機と子育ての意識の多相性についての研究
第 66 回公開研究会
「社会的ひきこもりに見る親と子の関係」

開催日:2012年3月13日(火)　18:30〜20:30
場　所:甲南大学18号館3階　講演室
講　師:安住　伸子(神戸女学院　カウンセリングルーム)

プロジェクト4. 心理療法の現在に関する検証
—臨床と研究の即応的関係の構築—
第67回公開研究会
「発達障害と過去の体験—タイムスリップ現象再考—」

開催日:2012年3月16日(金)　13:00〜15:00
場　所:甲南大学18号館3階　講演室
講　師:杉山 登志郎(浜松医科大学特任教授／児童青年期精神医学)
企　画:森　茂起(甲南大学教授／臨床心理学)

プロジェクト1. 加害—被害関係の多角的研究—和解と赦し—
第68回公開研究会
「恒藤恭における戦争責任と平和国家の考究
——日本の「和解」と「更正」の問題から——」

開催日:2012年3月16日(金)　16:30〜18:30
場　所:甲南大学18号館3階　講演室
講　師:広川　禎秀(大阪市立大学名誉教授／日本近現代史)
企　画:港道　隆(甲南大学文学部／哲学)

プロジェクト4. 心理療法の現在に関する検証
—臨床と研究の即応的関係の構築—
第69回公開研究会
「発達的トラウマと現代自己心理学
—治療的二者関係における至適な距離—」

開催日:2012年3月28日(水)　15:00〜17:00
場　所:甲南大学18号館3階　講演室
講　師:富樫 公一(広島国際大学准教授／精神分析)
企　画:森　茂起(甲南大学教授／臨床心理学)

公開研究会

プロジェクト3. 芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究
第70回公開研究会
「セラピストとしての芸術家
—参加型アートと複数の場をめぐって」

開催日:2012年3月31日(土)　13:00〜14:30
場　所:甲南大学18号館3階　講演室
講　師:石谷　治寛
(甲南大学人間科学研究所博士研究員／近現代芸術)
企　画:川田都樹子(甲南大学文学部／芸術学)、
西欣也(甲南大学文学部／芸術学)

プロジェクト3. 芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究
第71回公開研究会
「筆跡が世界を開く——アートとセラピーの間」

開催日:2012年5月26日(土)　13:00〜14:30
場　所:甲南大学2号館2-24教室
講　師:斧谷彌守一(甲南大学文学部教授／言語論・イメージ論)
今井真理(四天王寺大学准教授／芸術療法・脳科学)
企　画:川田都樹子(甲南大学文学部／芸術学)、
西欣也(甲南大学文学部／芸術学)

研修会

第9回　KIHS心理臨床ワークショップ
「NET(ナラティブ・エクスポージャー・セラピー)を学ぶ
—人生史を語るトラウマ治療—」

開催日:2012年3月20日(祝・火) 10:00〜17:00
場　所:甲南大学18号館3階　講演室
講　師:森　茂起(甲南大学文学部／臨床心理学)
共　催:甲南大学心理臨床カウンセリングルーム

発行年月日 :2012年7月20日

編集後記

今号の表紙写真は、今年度入学した広島出身の新しいＲＡさんが撮影してくれました(裏表紙もです)。表紙写真はこれまでさまざまな角度から人間科学研究所のある１８号館を撮影したものを掲載してきました。正直、ネタ切れの感もあったのですが、18号館を新鮮な視点で切り取ってくれました。ニュースレターにニュースレターをおさめるという斬新な(？)写真です。今年度のニュースレターは彼の写真を掲載します。乞う、御期待(笑)。

KIHS NEWS LETTER 2012
Vol. 26
発行
甲南大学人間科学研究所　Konan Institute of Human Sciences
〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1　甲南大学18号館内 Tel/Fax : 078-435-2683 E-mail : kihs@center.konan-u.ac.jp Web-site : http://kihs-konan-univ.org